

第三節	値仏の難
第三章	救済の法—本願力廻向の仏道—
第一節	廻向の系譜
第二節	如来廻向
第三節	二種廻向のはたらき
第四節	二つの勅命
第五節	名号に現前する廻向
第四章	救済の機—金剛心の行人—
第一節	本願成就の一心
第二節	三心一心の問答
第三節	真の仏弟子
第四節	阿闍世の救済
第五章	救済の利益—願生浄土の生—
第一節	功德としての浄土
第二節	念仏成仏
第三節	浄土を願ってこの世を生きる

結

全体は五章立てで、第一章は『教行信証』撰述の願いが尋ねられている。第二章は親鸞の『教行信証』の教巻の、釈尊と阿難との出遇い、即ち出世本懐が中心となっている。第三章は行巻の内容であるが、特に、名号と如来の二種回向が中心である。第四章は信巻の内容、特に、三心一心の問答と真仏弟子が究明されている。第五章は証巻の内容、『論註』の浄土莊嚴を中心に、浄土を願うことは却ってこの世に食い入って生きること、が明らかにされている。これらが「序」で始まり、「結」で結ばれているので、以下簡単にその概要を述べておきたい。

「序」では、本論文が人間にとっての救済の原理と、具体的な救済の事実を『教行信証』に尋ねていること。それが「親鸞の救済論」という論題とした理由であることが、述べられている。

第一章「浄土真宗開顕—浄土の救い—」では、親鸞がどのように浄土真宗と出遇い、生きたのかを生涯に沿いながら述べている。その上で、旧仏教からの専修念仏弾圧が、『教行信証』を撰述する課題であると考察されている。漢文を用い、「文類」という形を取って表すのは、当時の仏教界および思想界に訴えることと、後世に伝える願いがあることが述べられている。

第二章「救済の事実—顕真実教の明証—」では、「教巻」に依って阿難が釈尊に出遇った意味が考察されている。阿難は、長年にわたり釈尊の教えに接していたが、それまでは仏意に出遇っていなかった。仏意との出遇い、ここに阿難の救済の事実がある。それは、人

間の狭く浅い分別が破られることであるが、この出来事が、万人に開かれていることを親鸞は本願のはたらきに見た。だからこそ「行巻」以降に、本願が掲げられることになったと論究されている。

第三章「救済の法一本願力廻向の仏道一」では、如来の廻向によって誰の上にも平等に救済が成立すると、論究されている。その際、『浄土論』に説かれる五念門の第五の廻向門が、『浄土論註』では、如来の本願力であること。さらに曇鸞が、その廻向に往相と還相の二相を立てたことの意味を尋ねて、回向の二相が、親鸞に如来の二種廻向として継承されたと考察されている。この『論註』の廻向の文が、「信巻」の欲生釈に引用されることに注意して、如来の廻向の具体相は、衆生を招喚する勅命にある。それこそが名号に現前する廻向であると論究されている。

第四章「救済の機一金剛心の行人一」では、まず真実信心を尋ね、それが金剛心の行人を生むことが考察されている。親鸞における信心は本願成就の一心であるが、それが第十八願の「至心」「信樂」「欲生」の三心を内実としている。それが何故かを、三心一心の間答を通して考究し、その上で、一心が如来の願心の廻向成就であるが故に金剛心であることが論究されている。その金剛心を生きる者を、親鸞は「真仏弟子」と言うが、その具体的な姿を、「信巻」に引用する『涅槃経』の阿闍世の物語に尋ねている。

第五章「救済の利益一願生浄土の生一」では、まず「証巻」が語る往生を尋ねている。その往生の内容は、同時に仏教が究極的課題にしてきた無上涅槃道として語られている。それは、人間が仏に成るという課題に応えるのは、浄土の仏道しかないという親鸞の確信があったからであると考察している。さらに「証巻」に還相廻向釈が展開されるのは、往生浄土が浄土に向かうという一方向ではなく、この世で仏道を歩むことが利益として与えられることを尋ねている。この視点に立って、念仏往生が念仏成仏の道であることを確かめ、その具体性を「願生浄土」という言葉を通して論究している。

「結」で筆者は次のように言う、真実の教えは人間に何をもたらすのかを中心に、『教行信証』の流れをたどった。特に、『教行信証』の柱である往還二種廻向について、その説示の次第に沿いながら、それが現実を生きる人間の生き方に関わっていることを述べた。

今回は、前四巻を中心に考察したため「真仏土」「化身土」の巻には言及できなかった。これについては今後の更なる課題としたいと述べて、本論が終わっている。

II. 論文審査結果の要旨

本論文は、筆者のこれまでの業績を踏まえて凝集的に書かれており、論文の意図も明確である。その上で、なお疑問に思われる点、不明確な点等を議論し合っ、お互いに仏教の学徒として親鸞の仏道を明らかにしようという合意の下で、審査員と筆者との間で議論が重ねられた。それをここで全て挙げることは不可能であるが、主なものをいくつか挙げておきたい。

1. 『浄土論』で、善男子・善女人ないしは菩薩の行として出てくる五念門の行は、曇鸞の

『論註』でも、表向きは衆生の行となっている。それを、親鸞が法蔵菩薩の行と読むについては、『論註』の二道釈や八番問答や覈求其本釈が重要な意味を持つと思われるが、その他にはどんなことが考えられるであろうかと、審査員から質問が出た。

これは、真宗学における重要な課題であって、これまでも色々考えられているが、すぐに答えが出るものでもない。審査員と筆者の間でこれまでの説を基にして議論が深められた。このような質問が出たについては、本論文の底辺に流れている親鸞の二種回向が衆生の分際か、それとも如来の分際かという疑問があるからであった。それについて筆者は、親鸞の『教行信証』では回向はどこまでも如来の回向であり、衆生はその利益を受けるのであると、明快に答えていた。

2. 本論文は、親鸞の往生浄土が、浄土へ往くという方向のみならず浄土から還るという方向を持つ。そこに浄土を根拠にしなが、現実のこの世で衆生の成仏道が完成されると主張する所に、本論の優れた意味がある。しかし論述の進め方が、如来の往相回向（浄土へという方向）と還相回向（浄土からという方向）を確認する文脈と、その利益である衆生の成仏道とが、地続きに読めてしまう。如来と衆生の分際を明確にするために、衆生の仏道は、例えば信巻の現生十種の益、あるいは証巻の浄土の莊嚴の所で確かめた方が良かったのではないかという意見も出された。

3. 本論文が親鸞の救済論というのなら、そもそもの親鸞の課題は何であったのか、その課題を解こうとしてどのような求道があったのか、さらにその課題が解けてどのように救われたのかと、課題、求道、救済と順を追って客観的によく分かる論述にすべきではなかったか。それと同じように回向を論じる場合でも、天親の『浄土論』、曇鸞の『論註』、親鸞の『教行信証』と、それぞれの持つ位置を明確にしなが、回向の概念がどのように展開してきたかを、順を追って客観的に分かり易く論じる必要があったのではないか。真宗学の暗黙の了解の上で、本論が述べられている感が否めないという意見も出された。

おそらく筆者には、この論文の前提になっている多くの論文があるので、それらの基礎的な課題は、これまでの論文で述べているからであろうと推測された。

4. 曾我量深の有名な著書に「救済と自証」がある。それは『観経』の救済から、『大経』の自証へということが趣旨となっている。つまり救済という概念だけでは、『大経』を十分理解できないのではないか。『大経』は、大乘仏教の基本である自覚自証を明らかにしている経典である、という主張である。『教行信証』は本願論であり『大経』の論書である。曾私の指摘があり、本論が『教行信証』研究であるにも関わらず、あえて『観経』の香りがする「親鸞の救済論」という論題にした理由はなぜか、という意見が出された。

筆者は、今回の論文は救済の原理は何か、救済の事実は何か、という課題に絞って親鸞の仏道を明らかにしたかったので、『観経』と『大経』の違いまでは十分な配慮をしていな

いという趣旨が述べられた。

このほかにも様々な意見が出されて、議論が深められた。それによって筆者の本論の意図がさらに明らかになったことであった。それは、往生浄土の仏道の核心が、この世での凡夫の成仏道にあること。それが如来の二種の本願力回向によってのみ実現されること。この二点の推究と論証が、本論文の優れた特徴である。それによって、親鸞の仏道の現実的な意味を明確にした優れた論文であった。

審査に必要とされる最終試験および語学試験については、審査員全員により 2018 年 2 月 16 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、一楽 真に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。